

農業法人経営高度化シンポジウム議事録

日時：平成 21 年 3 月 6 日(金)13:00～15:00

場所：東京・浅草ビューホテル 4F「飛翔の間Ⅲ」

○プログラム

13:00 開 会

報 告 リンガーハットグループの CSR について

報 告 農業法人版 CSR ガイドラインについて

13:50 パネルディスカッション テーマ：「農業法人経営における CSR とは？」

15:00 閉 会

○出演

【パネリスト】

藤田 毅 (社)日本農業法人協会理事・社会的責任研究部会長

芹田 省一 (社)日本農業法人協会社会的責任研究部会副部会長

鷹野 秀征氏 (株)創コンサルティング シニアマネージャー

深浦 義輝氏 (株)リンガーハット 執行役員 CSR 推進室長

【コーディネーター】

紺野 和成 (社)日本農業法人協会専務理事

○議事

紺野(和成) それでは、ただいまご案内したとおり、これからシンポジウムに移ります。私は、協会事務局の紺野と申します。よろしくお願いいたします。

最初に4名のパネラーの皆様、簡単に自己紹介なり、ごあいさつをちょうだいしたいと思います。初めに藤田部会長、よろしくお願いいたします。

藤田(毅) 藤田です。先ほどお話ししましたので、次をお願いします。

紺野 芹田さん、お願いします。

芹田(省一) はい。秋田の芹田と言います。土地利用型で米・麦・大豆、それから加工して産直してお客さんに直接届けるということをしています。あとでまた細かくお願いします。

紺野 4名のパネラーの略歴については、紙を用意して皆様にご提示していますので、そちらも併せご覧ください。それでは、鷹野さん、お願いします。

鷹野(秀征) 鷹野でございます。私は農業を直接はやってはいないんですが、実家で、家庭で栽培をいろいろしていて、小さいころは本当に蚊に食われながら草取りをたくさんさせられた嫌な思い出があります。農業の皆さんを本当に尊敬しています。今回はかかわらせてもらって、大変ありがたく思います。よろしくお願いいたします。

紺野 最後に深浦さん、お願いします。

深浦(義輝) リンガーハットの深浦でございます。私の母は長崎の五島で生まれまして、小さいころは、休みのたびに五島ではあちゃんの畑の邪魔をしていました。あの甘いキュウリの味は忘れられません。よろしくお願いいたします。

紺野 ありがとうございます。社会的責任部会の部会長藤田さんと、副部会長の芹田さんはもちろんですが、今日のパネラーのお二人も、農業に非常に親しみを、あるいは経験をお持ちだということで、これからの1時間よろしくお願いいたします。

それでは、最初に皆様に配りましたこの紙1枚の中に、本日の討議のポイントを四点ご用意しています。最初のポイントですが、「農業の現場からの思い」ということで、部会長の藤田さんがリードされてきたこの「CSRガイドラインの作成」についての重要性とか必要性とか、消費者へのメッセージなどについて、お話、コメントをいただきます。藤田さん、お願いします。

藤田 僕もこれに携わりながら、この1年半を過ぎたところですが、最近CSRでの立場から大体世の中の事象を見るようになっていて、それこそ中川（昭一）前大臣の政治家としてのCSRはどうなんだろうとか、トヨタ（自動車）の、あの大手自動車産業の派遣切りはいったいどうなんだろうとか、特に大企業向けのCSRについて少し最初のころに勉強して、すごく進んでいるんだな、追い付いていこうという気持ちでいたのが、どこまでどうなんだろうとかいう、ちょっと整理がつかないような状況ではある気がしました。

そしてこれを進めている間に、農業というのはちゃんとやっていけば一番いいCSRになるのだなと、そうやっていかなきゃいけないと思います。「ちゃんとやる」っていったいどうなんだろう、「ちゃんと」と言っても結構アバウトでありがちなわけです。そこでしっかりした何かが必要なのかと思います。

例えば、農業をやっていく「ちゃんと」の中に、「GAP（適正農業規範）」等があります。最近出てきています。この「GAP」も、それをちゃんとやる手法の一つなのではないか。そういう面で、これから農業法人が向かうところには、そういった手法も含めて考えていったらいいのではないかと思っているし、そういうことが食品偽装を含めて防止できる方法かと思っています。

私どもは、基本的に社員の数がそんなに多いわけではないので、トップダウンというよりは透明性と、会社のみんなで作りに上げていくことがきっと会社にとってはプラスになると思っています。

紺野 ありがとうございます。引き続き副部会長の芹田さんに、この1年間の検討されてきた部会でのロケーション、熱心な議論がなされたと思いますが、その辺も少し会場の皆さんにご披露いただけたらと思います。いかがでしょうか。

芹田 私のところの経営から感じているところも言いながらと思いましたが、簡単に言わせてもらおうと、まず「社会的責任」という言葉は、正直この部会に参加してから勉強させてもらいました。とにかく非常に堅苦しかったし、全く考えたことがなかったというのが本当に正直なところでした。

参加してみて初めて、「社会的責任」というのはどういうことだろうということで一から学んで、じゃ、自分の経営でどう対応されていたんだろう、生産から加工、加工は委託販売ですが、委託販売をしてその商品を全部買い取ってお客さんに届ける。まさにそこまでやっているのと、どこで何があってもおかしくない。ホットな情報ですが、つい1週間ぐらい前に、「お宅さんの黄な粉を買った。開けたら、金属片が入っていました。で・・・」という話があって、びっくりしました。まさに、「お宅さんの工程管理はどうなっているんですか」と言われるわけです。

ここで、ここまで勉強してきたことが一気にいろいろ思い起こされて、対応はできたと思います。早急にすぐおわびかたがたファクスをして、すぐ原因究明にあたります。原因究明にあたっては、たまたまこの会議も一様にあつたので、そういう事情を説明して、「もうしばらくお時間をください。やりましたら早急に対応をしますので」とやりました。原因も今はある程度わかってきたところです。それはあとでまたはっきりと解決策というかたちで、お客さんに届けなきゃいけないと思っています。

そんなことをここで経験したことも含めて、会員の皆さんのところに行かせてもらって、その都度この部会員の皆さんで、行った先々で見たことを情報交換をするわけです。

部会員の中に松永さんとか、「ISO」みたいなものを取り組んでいる、畜産経営、酪農でそういうことをもうやっている人もいて、私らがここにいるよりも、きっと皆さんのほうでずっと進んでいる人が多いのかと思いました。

そうは言いながら、1,700会員の農業法人のメンバーの中では、やはりどうしても格差というか、温度差があるのも実感して、社会現象としていろいろなことが起きています。この法人協会としても、この社会的責任は堅苦しいことではあるが、避けて通れないだろうと。

だから、本当に全く無知な状態で入らせてもらったわけですが、そういう本当に謙虚な気持ちで、でも、積極的に自分の経験をいろいろ通していくことで皆さんにお伝えすることが、結果として農業法人の皆さんのお役にも立てるのではないか。そのかたちが、またそれぞれの会社の地域貢献、社会貢献にもつながるだろうという、ちょっとおおげさな理屈をつけてやっています。これは今後ともぜひ継続して取り組んでいかなければいけないことだと。そのポイントは、まず自分の生き方としてもそうですが、あまりばか正直になるのも困るということがありますが、まずうそがないことです。

それから、自分たちの経営と同時に、地域社会と私どもは密接につながっていて、切っても切れない家族と同じで、そういうところで私どもは経営活動をしている。だから、自分さえよければいいのではなくて、それこそ地域の仲間の皆さんとも一緒に、今後はそういう意識をしてやっていかなきゃいけないだろうということ、この今1年半かけてやってきたところで感じています。

紺野 藤田さん、芹田さん、ありがとうございます。今、「うそがない」というキーワードがありました。この社会的責任部会、北から南まで10名近い部会員が全国津々浦々集まって、うそがない議論を展開されて、今日ここにある、これもうそのない内容であり、一生懸命討議されてきた成果がここにまとまってきているということをご報告しておきたいと思います。

今度は企業側のお二方、まず深浦さんにお伺いしましょう。企業の現場で感じていることということで、CSRガイドライン導入初期の会社内のご苦労だとか、この制度を社内に普及させるためのいろいろご苦労などがありましたら、お披露目いただきたいと思います。

深浦 はい。ここでも、「CSR」と書かれているように、なかなか「理解したくない」、「CSR推進室が勝手に何かをやっている」というふうに思われがちです。

店長会議のときなどに時間をもらって、一つ一つの社会的責任領域とか、コンプライアンスに関しての話はずっとやってきています。やはり営業活動を行う中でいろいろな問題が起きていますので、その問題を例として挙げて理解をしてもらうことと、あと一つに関しては、「なかなか経営トップが理解をしない」と。一番理解をしたがらないのは、経営トップじゃないかと思いません。

いくら話しても、自分が都合が悪いと感じること、お金が出ていくことについては、なかなかはんこを押してくれないという状況があります。「うそをつかないというのがキーワードだ」と芹田さんが言われましたが、地道に、時にはうそをつきながら、経営トップをだましながらかつていくのも一つの方法かなと。あくまで社内ですが、経営トップにうそをつきながら、「これ、やっちゃまずいですよ」、「これ、ばれたらとんでもないことになりますよ」と脅しながら、半分うそをつきながら、今は進めている状況です。

紺野 ありがとうございます。引き続き鷹野さん、お願いします。

鷹野 はい。ありがとうございます。コンサルタントとして、CSRの導入の支援をさせてもらった中で苦労することが三つあります。一つは、まずやはり横文字だということです。今、拒否反応のような話がありましたように、まず「取り組みたくないな」、「あまりさわりたいくないな」

というところが本当に入り口です。

推進担当の人は、もちろん勉強をされるので理解を進めていきますが、まさに深浦さんが言ったように、経営トップがすごく大事なところ、「なぜ取り組むのか」というのがすごく大事なところですが、ここを理解をしないまま入ってしまうケースが多い。ここはすごく苦勞をします。その「なぜ」がないまま、「じゃ、何に取り組むのか」という、これが二つ目の課題です。何に取り組めばいいのか、これがなかなかわかりにくいです。

先ほどご紹介したように、大きく五つの分類があって、幅がものすごく広い。「じゃ、何に取り組むの」と。そういうときにガイドラインのようなものを参照するんですが、書いてあることがまたよくわからない。この「わかりにくい」のオンパレードがどうしてもあります。「何に取り組んだらいいのか」というところがわかりにくい。

ガイドラインは世の中にたくさん出ています。グローバルなものから日本のものまでたくさん出ていて、企業の人に取り組むをするときに、そのガイドラインをさまざま見比べながら一つの表にしたり、苦勞して、「あ、これとこれとこれはやっている。これはやっていない」。そうすると、「何で取り組むのか」ということ自体が落ちて、そのうちの細かい、「じゃ、これに取り組もう、これに取り組もう」とその方針がないままに始まってしまう。こういうところで苦勞します。

もう一つは、やはり現場の人々に、「どういうふうに理解をしてもらうのか。何でこれをやるのか。何をやるのか。どうやってやるのか」。最後の「どうやってやるのか」というところは、本当に経営トップに直接対話をしてもらうことをしないと、なかなか現場の人の理解は進まないということが課題です。こんなところが企業で進めているうえで大きな課題で、三つ言わせてもらいました。

紺野 ありがとうございます。農業生産の現場にいるお二人の社長からのコメント、それとコンサルタント、外食産業の4名からそれぞれご経験を踏まえたお話が披露されました。

ここで3番目のポイントとして、「農業法人の取り組みCSRとはどんなことができるのだろうか」ということから、私どもは現地視察を重ねています。藤田さんと芹田さんからそれぞれ2社ずつ、この資料に沿って概要をご報告いただきたいと思います。よろしくお願いします。

藤田 はい。今回4社の視察をお願いして、4社とも真摯に視察をお受けいただき本当にありがとうございました。この場をお借りして、御礼申し上げます。私はまず最初のJETファームについてお話しします。

この会社は、会社概要にあるように、相当大きな、日本においてはメガファームと言える会社だと思います。ここに至る中で、見た限りは本当にこの規模拡大ともに、糞尿処理を含め、環境的な問題を相当苦勞されたというのを感じました。

その打開策の一つとして、「社内、社員一同でISOの認証取得を」ということを進めました。この取得をするということが、社員みんなで一丸となってやって成果を上げているいい例だという感じがしました。これからまたISO取得を継続するとなれば、またそれなりの苦勞はあるのかと思いました。

続いて株式会社アズですが、ここに、「洋ラン栽培」とあります。最初に言われたのが、「バブルのころは何でも売れた」と。非常に何でも売れたという感じだったのですが、「今の時勢では、非常に大変な時代にある」と話されましたが、JETファームからここに来たときのギャップもあります。非常に農業の違うよさを感じました。

その一つが、音楽とのコラボレートでのイベントです。地域の人を細かくよく知っていて、本当にいいタイミングでイベントを生まれ、癒しという効果でしっかり社会貢献をしていると感じ

ました。私は、この2社でそういうことを感じてきました。

芹田 はい。私からは、株式会社ごはんです。ここは新潟の魚沼の本場というか、山の中の豪雪地帯で積雪が3メートルぐらいにもなるそうで、川1本隔てた向こう側が長野県でした。そこで10町歩の有機栽培をやっている。「え、10ヘクタールの有機栽培をされるんですか。どうしているんですか」と見せてもらったのが、次のページにある手作りの工夫された除草機でした。

これも見せていただいてびっくりしました。農業の皆さんがほとんどだと思いますが、ビニペットがありますね。ビニールを押さえるあのビニールにスプリングを掛けます。あのスプリングが30センチぐらいに、ミヤマぐらいを切られたやつが2センチ間隔ぐらいで全部くっついていきます。それはめくら除草なので、それが2列になっていてダブっているわけです。だから、1センチ刻みでそれが引きずられていく。3列目にはちょっと違ったかたちのものがあって、かたちの説明をすることはないけれども、そういう工夫です。このときは、5号機を見せてもらいました。

5年かけて今年ようやく7人で、その10ヘクタールの田んぼを除草剤を使わずに、何とかコナギとかコウヨウの雑草を抑えて管理できて、二百数十人の雇用を使わずにやれたという話をしていました。それを見せていただいて、びっくりして帰ってきたところです。

お米の販売単価も、5キロで6,500円から7,500円。5キロです。そういう値段で売れるならどんなこともできるなと思いながら言いましたが、それでも単純に高く売れるから有機をやっただけではない、ああいう山の奥で、それこそ魚沼の「こしひかり」の本場できちっとお客さんに安心安全なものを届けるという姿勢のところから有機栽培に掛かって、認証も、非常にその第三者にやる手間ひまは掛かります。そういうことも含めて取り組んでこられた。本当に見事だと思います。

もう一つ新しい技術、これは中小企業との連携で特許を取得されたということでしたが、「液状炭酸ガスによる米の洗浄」と聞いてびっくりしました。部会員の皆さんが行ったときに、事務所の中にその炭酸ガスで洗浄した米の袋、和紙の袋に印刷されたのが乾かすために全部広げられていたんです。何だろうと思って見たら、まさにこの袋に米を詰めて売るんだそうです。2年たった白米を、「ちょっとにおいを嗅いでください」。で、開けてにおいを嗅いだら、古米臭が全くない。まずこれは画期的な技術だろうと思って見てきました。ごはんさんは、それを開発されて特許を取られてやるということですので、多分今にこういうものがまた世に出てくるだろうと思います。

山奥でそういうところで感激したことと、もう一つは、長野県のトップリバー、嶋崎（秀樹）さんのところでした。レタスとか、長野の西軽井沢の辺りで、約5億から6億ぐらいを野菜の生産から販売まで取り組まれています。トップリバーの特徴は、ただ生産販売をしているだけではなくて、若い人たちの人材育成も兼ねてやって、独立させることを前提に若い人を育てていく。ここで導入されていたのは、GAPでした。

それは社長からトップダウンで下りたのではなかったと思いました。確か従業員から、「こういうことがあるんだ、やりましょうよ」で、普段からトップリバーで取り組んでいる業務の中身が即そのままGAPの認証につながるということから、社長も説得されて動いたみたいな話をしていましたが、まさに人材育成を通して、外部から若い人たちをどんどん入れてやっている中で社長も刺激されて動いているという実態を見て、本当にびっくりしました。

ここに写真が載っています。ちょっとここではよくわかりませんが、レタスの収穫されたあとが全マルチでした。一畝一畝がマルチされて土が少しでもあるのではなくて、全部、全マルチでふさがれている状態です。そこで、トップリバーさんの収穫されたあとは残渣がありません。き

れいになっていました。だから、マルチだけ残っている。その奥に、ちょっと左側の写真で見えますが、違うグループの人たちのは、そこに残渣が残っているという状態でした。

だから、嶋崎さんのトップリバーのところでは、そういう生産管理全体を、さっき言ったGAPの考え方ですごい取り組みがもうできているということを見て、本当に勉強をさせられました。

紺野 ありがとうございます。お配りした冊子の32ページをちょっと開いてもらって、32ページの上の写真、今ご報告いただいた芹田さんがネクタイ姿で興味深くのぞいている写真がありますし、この冊子の最初の下のことですね。ここがまさに現地にお邪魔したときに、こういうスタイルで現地で暑い中、2時間も3時間もやっているという点で、うそがなく一生懸命やっていた研究会だと思います。

深浦さん、今生産サイドのお二人から農業法人が取り組むCSRの現状なり、この水準について報告がありましたが、外食産業の人からこれらの取り組みについて感じる点について、コメントをいただければと思います。よろしくお願いします。

深浦 はい。非常にすばらしい取り組みをされていると思いますし、ぜひお付き合い願いたいとも思います。ましてやいろいろな技術開発とか商品化も含めてされていたり、「地域と共生していく」という部分で本当にすばらしい取り組みをされている人たちが多くと思います。

ISOの取得をされているところとか、後継者育成とか、多分今は社員として働いている人々が、そういったことをやることに誇りを持ってされているんじゃないかなと感じました。私どもも社員には、「自分たちがやっている仕事に誇りを持って」と言っているんですが、現場で一緒に汗を流してそういったものを伝えていることは、繰り返しになりますが、本当にすばらしいことだと私は感じました。

紺野 ありがとうございます。鷹野さん、同じような観点からご意見を伺いたいのですが、特に鷹野さんの場合は、この1年間、これら現地視察にいつもご同行いただいて、われわれと一緒に汗を流していただいたと思います。現場でそういう事例を見たときに、評価できる面とまだまだ課題になる点、あるいは他産業においても参考になるのではないかと、この辺の観点からコメントをちょうだいできればと思います。

鷹野 はい。まずは同行させてもらい、本当に私自身も大変勉強になりまして、ありがとうございました。4人に共通で言えるのは、皆さんすごく熱い思いを持っていて、自分のやる農業がこうあるべきだという強い信念をお持ちだと感じました。これは本当に共通で、そう感じました。すばらしいですね。

CSRを推進する中で、「経営トップの」という話が何度も出てきましたが、こういう人たちが推進をしていくことが現場の人たちも付いていくことになるんだろうと感じています。そこはすごく評価をできる点、大企業ではなかなかできない点かもしれません。小さい企業ならではのよさが、非常に生きているなと感じています。

一方、ともすると、「独り善がり」と言うところちょっと言葉が悪いですが、そうなりがちな危険性もあって、周りの人をいかにうまく巻き込んで、さらに自社だけではなく、周囲のお付き合いのある人々にもっともっと広めていけるともっとすばらしいなど。課題というよりは、むしろ期待と申しますが、そんなことを感じました。

紺野 ありがとうございます。「経営トップが大事だ」という言葉を受けて、経営トップの芹田さん、今のお二人のいわゆる農業外の人から見られた現在の農業のCSRの現状についてのコメントでしたが、このコメントを受けて、どんな受け止め方をされますか。

芹田 皆様も報告を聞いて多分、「こんなことをやっているんだ」ということを多分感心してもらえたのではないかと思います。まさに「いい取り組みをされていることはないか」と言って事

事務局が探したことだから、先進例として皆さんにご披露をしても恥ずかしくないところが選ばれたとは思いますが、そうはいいながら、やはり法人協会の皆さんの取り組みを私も参加して、皆さんとお付き合いをさせてもらうことで感じていることは、まさに今、鷹野さんからありましたが、すごい創意工夫や努力をされている人たちがほとんどです。

自分自身も、なぜこの法人協会にこんな家族経営の、法人化した自分がこんなところに出しゃばっているんだろうと思い、そういう取り組みをしている皆さんの姿勢に常に刺激されたし、まず学ぶべきことがごろごろ転がっているんだということを実感して今まで来ています。

ですから、こうやって知り合った私たちが、この法人協会を縁に、まさにこういう研修も含めて情報交換を生かして、さらにそれぞれの経営、そして先ほど鷹野さんからあった、「地域にお返ししていく」ことができれば、これは最高だろうと。

欲張りかもしれませんが、本当に日本農業法人協会の存在意義がそこでまた評価として出てくると思っていますので、参加されている人は少ないかもしれませんが、ぜひそういう意味でのお酌み取りをいただいて、それぞれの経営活動に生かしていただけたらと思います。よろしくお願ひします。

紺野 もう1人の経営トップは藤田さん、鷹野さんと深浦さんからは、農企業としてのCSRの重要性、今後の取り組みの必要性も触れてもらいました。一方で、地域に存在している農業法人がCSRを果たすことで、その地域への貢献、あるいはその地域にいる、食する消費者、その人たちに対する農業法人のCSRの取り組みの意味だとか必要性だとか、その辺のコメントをいただきたいと思ひます。

藤田 いや、ちょっと難しい問題です。もちろん自分たちだけやればよいという時代でないというものはっきりしている段階ですので、そのことはもちろんですが、先ほど「ISOに取り組んでいればよい」では済まないなというのをちょっと感じていましたので少しだけ補足をしたいんですが、昨日も講演で、中国の餃子の問題で、「その会社はISOを取得していた」というのがあって、確かにこれはただ取得すればいい問題ではないと非常に僕は今強く感じています。

問題なのは、それに取り組んでいる姿勢が会社全員であるかどうかということです。全員がそういう姿勢を持ったときに、例えば農業現場で、地域の農家、周りの農家もそれを見てももらえるんじゃないかと思ひます。やはり行動が非常に大切に、上辺ではできません。毎日の農作業を通して、周りの農家、地域に影響を与えていくというのは大切なことだと思ひます。

紺野 ありがとうございます。今日はお二人に基調講演をいただき、われわれ会員の社長お二人もこうやって登壇されています。今までの討議を皆さんに聞いていただいて、4名のパネラーの皆さんにご意見やご質問等がありましたら会場からちょうだいしたいと思ひます。どなたかいらっしゃいますか。よろしくお願ひします。

なければ、いつも私自身が事務局でご指導いただいている茨城の照沼（勝浩）さん、突然振ってすみませんが、この40分、50分、あるいは基調講演を聞いたご感想なりご意見をちょうだいできればと思ひます。

照沼 茨城の照沼です。どうもありがとうございます。私も大変大切なことだろうと思ひています。そうでなければやはり企業も持続はできないと思ひます。実は私は今、「茨城県最高品質農産物研究会」を立ち上げて、その中でうたっているのは、サステナブルビジネスです。要するに、どういうふうで持続していこうかという「持続できる農業」です。

そこに行ったときに、私が今取り組んでいる中で一番の問題というのは、やはりその地域に對することで、私も今は現在60ヘクタールの畑を耕作していますが、その分かれている場所が約200カ所。筆数ですと、600筆あります。でも、ほとんどが隣接している住民がいて、そこで何が

起きているかという、「農業は公害だ」と言われます。

これはなぜかという、「事前に畑を作業するときに言ってもらわないと、せっかく洗濯を干しておいたのに、帰ってきたら汚れていたよ」とか、今度は農薬の問題、いろいろな問題があります。こういった問題をどういうふうに解決していかなきゃいけないのかということを感じています。それと、やはり近くで私どもが農薬を使うことと、住民が農薬を使っていることで思うことに大きな差があるということです。必要ないわけですから。

だからそれを考えたときに、私どもは必要とされる農業をしていくためにはどうしようか。やはり努力はしなきゃいけないだろう。それを、今度は経済の中とか、一つにはこれは従業員も同じだし、逆に言うと、「照沼商店で働いて、農薬に掛かりながらで、かわいそうだね」とか、そういう問題にもなりかねません。

もう一つには、やはり農薬の問題で、暑いさなかに、今度は福利厚生の部分から、社員に農薬を使わせることがまず不可能になってきます。そう考えたら、もう農薬をやめるしかないということでうちは農薬をやめました。これからはその辺のところをよく考えて行かなきゃいけません。

それと私の今の課題としては、非常に便利な社会になって、農業者、農業法人が今は地元では必要とされていないんじゃないか。これでは意味がないだろうということで、最近になってうちも社内で、「何のために、やっぱり農業を」ということで、その意識が多分今後は、今のCSRというようなかたちで、理念とかその中にかかわる問題とか、私も今、本を6冊ほど買いましたが、非常に大切なことです。

ただ農業の場合には、自然が相手ということと、これを全うしていくためにはよっぽどの社会的認知を持っていかないと、環境のことを考えるときに、申しわけないですが今の理解のない社会の中だとやはり違います。嗜好で食べるのか、健康のために食べるのか、その辺のところまでの深い問題に入っていくと考えています。

その辺のところを含めて、今後は、例えば土地利用型の人とか、特に農薬の問題、化学肥料の問題、あとは堆肥一つ取っても、逆にそれが本当がいいことなのか悪いことなのか。規制はないじゃないかっていうことは、こういうことから今度は国に対しても訴えていく。勝算が6千や7千もあるものがあって、お客様が食べたときに、本当にそれはいいことなのかと。だから、しなきゃならないことというのは、多分今回のようなかたちで責任を考えるといっぱいあると思います。

ですからこれを機に、品質も含めて、何のために農業をやるかということの原点に戻れるいいチャンスだと思いますので、今度は私も仲間に入れてください。よろしくお願いします。

紺野 これは、じゃ、部会長からまず……。あと鷹野さんにもぜひ。6冊もお買いいただきましたし。じゃ、部会長から。

藤田 まずフレ筆が多いということとか、うちもそうですが、大体農業法人というのが地区に1個しかないとしたらまずは、「これはいったい何をやるんだろう」という警戒心が与えられて地域的には非常に問題が起きやすいです。

そういう中で、何とか仲よくなりながら交歓をしながら筆数を減らしていくというか、面積、1個ずつの区画を大きくしていくことに非常に努力していたり、逆に農薬を使わないで（土地の）疲弊が出たら、「それは駄農」みたいなことを言われつつ、地主は、「あそこの法人には貸さない」とかって始まります。この地域というものに対する農業法人というのは、なかなか後押ししてもらっていない状況の中で、地道にそれもやらなきゃいけないのかということと、GAP等について携わっていけば、農薬はあまり使わないほうが手法としてはやりやすくなりますので

、やはりそういう方向というのは必要だと今は本当に思っています。

紺野 ありがとうございます。鷹野さん、茨城の照沼商店さんの照沼社長は、農業法人業界の中にあっても非常に先進的で、かつ優良な経営をしている法人です。そういうリーダーがその地域の中において、「農業公害だ」と。農薬だとか、農薬散布による住民との関係について悩みがある。そこから来る法人の職員に対するモチベーションの問題も恐らくあるでしょう。この辺をコンサルタントの立場からどんなアドバイスがちょうどできるのか、いかがでしょうか。

鷹野 まずはお買い上げありがとうございます。非常に難しい問題ですが、中小企業のCSRの事例で紹介されるものの一つに、地域の清掃を一生懸命やっているという会社があります。清掃活動をやっている会社は多いのですが、その徹底度合いが違うというところが特徴です。

いかに地域から信頼を得られるかというところが大きな鍵かと思うのですが、それは本当に日々の、地域の皆さんがどういう目でその会社、その会社の人を見るかということに掛かってくるのかと思います。

相当長い時間がかかると思いますが、もしそこで信頼関係が築けていれば、「公害」というような言われ方ではない、指摘はあるかもしれませんが、別の言い方をされるかもしれないと思ったり、やはり日々のお付き合いというのをいかに社員皆さんで、これは社長だけの話ではないと思います。従業員みんなが本当に真摯に、「地域のためにわれわれはこういうことをやっている」というものを見せていけるかというのも、大事な取り組みかと思います。

参考になるかどうかはわかりませんが、地域からの信頼を得るのは、やはり交流しかありません。お互いを知らないからそういうことを言う。もっともっとよく知る、これに尽きるかと思います。

紺野 この会場の中にも、農業法人で地域との交流を率先している経営者もいらっしゃいますが、もうお一方いかがでしょうか。あるいは、今日はリンガーハットさんもいらっしゃいますので、日々の業務を含めて何か・・・と言ってはちょっとまずいですね。CSRに限定したほうがよろしいですよ。

深浦 いや、いいです。

紺野 とおっしゃっていますので、この機会に何か外食産業の方にご質問があれば、いかがでしょうか。それでは部会のお二人から、「阿部（雅良）さんにぜひここはコメントをいただきましょう」ということで、ひとつよろしくお願いします。

阿部 私は立場が二つぐらいありまして、ダイアファームという会社では、今、経理面を社員とともにいろいろ作って、この会社がどういう方向に向かっていくのかということ社員と共有していて、ビジョンまで今は作成しつつあるんですが、ただ、やはり平場で農地を持っていますので、そこで5月には水を入れたりしてダム効果とか、そういった多面的機能はやっていくことで、いわゆる国土保全の問題とかの中で貢献しているという気もありますが、ただ、例えばわが社がなくなれば、いずれその農地をだれが守るかという、多分ないと思います。そしていずれは農地が荒れて、遊休農地、耕作放棄地が出てくれば、本当に自給率も下がってくるしということで、存在意義というものは当然あります。じゃ、それを本当の意味で守るときにどうするかということは、いつも自問自答しています。

自分たちの持っている企業としてのCSRと、農協のCSRもちろんあります。私はたまたま農協理事をやっていますので、農協の持っているその組合員という問題で、いつもここに来ると私もジレンマがあります。農協の中で守られていて、組合員がその消費者で見えないためにめくらになっていて、なかなか成長してこないという中で、農協が金融共済をやってもうかっているというような、その中で理事をやっているのですからかなり難しいところがありますが、農協内部の

中で農協を変えようと思ってもがいています。

なぜかという、私の座右の銘というか、うちの管轄は農業しかないので、農業を振興して地域を振興していきたいというような役割を自分で決めていますので、そういうときのその各団体によるCSRが違うときに、「さてさて」というふうなことでいつもジレンマがあります。「あの場に行けばこう言う、こっちの場に来ればこう言う」ということではまずいので、自分の意味で今は頑張っていますが、そういう組織的な大きな問題もありますので難しいのです。今はそういったことの立場の違いもありながら、頭の中では一緒にして挑戦しているというのが実態で、そういった組織的な違いの中で、どういうふうにやっていけばいいかということで、もしアドバイスがあればよろしくをお願いします。以上です。

紺野 これは芹田さんか、鷹野さん・・・。じゃ、鷹野さんに。

ご自身は、ご自身が経営する農業法人におけるCSRの必要性も十分認識している。一方で、社長ご自身が地元の農協の理事も務めている。農協及び農協組合員においてもCSRの必要性はある。しかし、私企業と共同体のCSRには温度差がどうもあるようだ。今後そういった事業協同組合におけるCSRの在り方について、何かアドバイスがいただけたらどうでしょうかという整理じや・・・。よろしいでしょうか。

鷹野 はい。ありがとうございます。立場の違うところということですね。CSRの一つの特徴としては、「一緒にやる」という考え方があります。企業だと競争ですが、CSRは同じ社会の課題を、例えば環境の問題を解決するのに、お互い競争し合うというよりは、むしろ一緒に、協働してともに働いてやるという、こういうのがCSRの取り組みの仕方、特徴の一つです。

ですので、この考え方をうまく違う立場で、じゃ、お互いをどういうふうに、一緒にやっていけるのと別々の、それぞれの視点で考えられると、逆にすごくメリットがあるかもしれません。やりにくい面もあるかもしれませんが、逆に「こっちの立場だとかこう考えるのに、農協の立場だとかこう考える」、この接点を見つけられていく可能性があるんじゃないでしょうか。

それを逆に考えると、一緒にやれることがたくさんあるという。利害の対立する部分ももちろんありますが、その中で一段上の目標、目的というところにちょっと視点を置いて、じゃ、一緒にその課題に取り組んでどうすればいいのか、こんなやり方をぜひ模索していただければと思います。

紺野 鷹野さん、ありがとうございます。それでは、男性お二方のお声をちょうだいしましたので、女性の経営者の方にお一言と思いますが、和歌山の新岡さん、突然振ってすみませんが、農業経営の現場から今のお話を伺っていただいて、コメントをいただければと思います。

新岡 和歌山の新岡でございます。CSRですが、まだ具体的にどうのこうのはあまり・・・、頭のどこかに「うそはつかない」とか、そういうことは常に思っていて、まじめな継続する経営をしていきたいと思っています。

すべては、私がこうして自分自身が話すことよりも、自分の商品にすべてのことが表れると思って、パック詰め、包装から開けたときの感動とかに、そういうものがすべて表れるように従業員にも言っていますし、徹底するかどうかはあれですが、小さい農園の会社なので、口をすっぱくして言っています。

こういうふうになんとしたことを勉強させていただいて、いろいろな農業法人のCSRというのが、一般の企業よりはどういう面が違うかと思って、さっきも23ページを比較して見ていたんですが、やはり農業法人というのは、いろいろな生態系の保全とか、動植物の生物とか、そういう自然環境も守っていくということがあります。それがこれから一番大事だと思います。

今までは企業も売り上げ中心で、多ければよい会社と言われたのがすごく印象にありましたが

、これからは売り上げよりも中身、CSRとか、うそがないとか、そういうことをもっと重要視しないといけないと思いました。

けれども、経営するうえでは、ある程度利益もないと従業員も雇えません。これから先は、自然環境も自分たちが守っている、農業をしている者は自然環境、木1本、草1本、全部守っているということについての価値を、消費者にもう少し見守ってもらいたい。

価格の面も安売り競争じゃなしに、もう少しそういう面を見て、農業生産物が需要と供給の加減で値段が決まっていくようなことでは、うちの場合は特に果樹ですので、「桃栗3年柿8年」と言うぐらい植えてからのスパンが長く木を枯らしてしまったらだめなので、最小限の農薬はやっていかないとという面もあります。そういう面をもう少し消費者にご理解いただけるようなことをどんどん・・・、どなたに頼めばいいのかわかりませんが、やってくださいというのが今の感想です。もっといいことを言えたらいいと思いますが、すみません。

紺野 突然に振ってすみませんでした。お許してください。ありがとうございます。今の新岡社長の思いは、こちらの社長のお二人もほぼ同じような思いでいると思います。

だいぶ時間が迫ってきましたので、最後に私からお一人指名したいのですが、実は今日ここに日本経済新聞社から木村さんという記者が来てくれています。彼は、「われわれ日本農業法人協会の先進的な経営を全国に紹介してほしい」とお願いしたところ、非常に積極的に取り組んでくれて、先日も熊本の松本農園さんの「CO2の見える化」について「日経MJ」に特集を書いてくれました。

ちょっとご紹介をしたいと思いますし、いつもの取材の現場から、今日は4名がいらっやっていますので、どなたかに最後にひとつご質問をいただければありがたいのですが、いかがでしょうか。

木村 日本経済新聞の木村と申します。私は今、農業、野菜、果物を担当していて、まだ1年たっていませんが、松本農園をはじめとして、農業法人協会に加盟されている、本当に先進的な経営をされている人々のお話をこの1年間聞くことができ、去年までは普通の消費者として、農業あるいは野菜・果物というのを見ていましたが、1年間本当に現場をいろいろ回らせてもらって、また違った考え方を持つことができたり、理解が深まって本当にいろいろと勉強になりました。

質問としては、普通の企業のCSRというと、かなり資本が大きくてやりたいことを結構できると思うんですが、やはり個々の農家とか、農業生産法人だと、どうしても規模は小さかったりとか、できることが限られると思います。業界を挙げて、あるいは地域で連携していろいろとやれば、もっと消費者に伝えることができるんじゃないのかと外からは思いますが、中のほうではそういった意識というのはどうなのかということをお聞きしたいと思います。

紺野 ご質問ありがとうございます。ここは最後に、藤田部会長にコメントをお願いします。

藤田 それでまさに今、ここで農業版CSRのガイドラインを6月までにまず第一回目を作って、またその後順次よりいいものにしていくということを、日本農業法人協会がバックアップしてやっていけたらいいと思っています。

紺野 皆さんありがとうございます。3時も迫ってきましたので、最後に今日は基調講演で、鷹野先生、深浦先生にいらしていただいていますので、最後にお二方からそれぞれ農業法人に期待する社会的責任について、期待なりエールも込めてお言葉をいただければありがたいと存じます。じゃ、鷹野様からよろしく願いいたします。

鷹野 二つ、期待を持っております。一つは、自然と人間のいい関係、これをぜひ追求を本当にしていただきたいと思っています。一番自然に近い、人間の生命の源である食を担っている皆様

、人間自身についても深い理解を実際に持っていらっしやるのではないかと。自然と人間ですね。これは本当に根元だと思います。ここが一番責任の重い部分であると思います。これが一つです。

二つ目に、ぜひ若い人たちに、「いかに農業に就いてもらうか」ということをお願いしたいと思っています。私の周りでもたくさんいます。農業をやってみたいという学生に相談を受けたりします。そういうNPOなども付き合いがありますし、ぜひそれを進めていただきたい。

私の子どももまだ1歳半ですが、ぜひ皆さんの農場に行って、一緒に農業体験をさせたいと思っています。こんなところが動くと、大きく日本の農業も動いていくんじゃないかと思っています、ぜひそういう力を皆さんからお貸しいただきたいと思います。よろしくお願いします。

紺野 じゃ、深浦さんお願いします。

深浦 今日は逆に貴重な体験をさせていただいてありがとうございます。口下手で、途中で何を自分が言っているのかわからなくなるような性格ですので、逆に皆さんにご迷惑を掛けたかと思いますが、お話を聞いていて、やはり自分たちが生産しているものに自信を持っておられるということを非常に感じています。

皆さんが自宅で食べる野菜とか果物とか、いろいろなものが外食企業の一つの材料として、おいしいものを安心して食べられるというかたちを今後も続けてもらえればと思いますし、最近エコ関係、「環境にどうこう」という、コマーシャルはすべてそれになっているんですが、逆にまた農業法人協会で、「農業が今一番注目を浴びてくるんだよ。環境にもいいんだよ」ということを農林水産省の尻をたたきながらアピールしていかれたら、皆さんももっと誇りを持って、「うちは農業をやっています」、「どこで何を作っています」と言えることができると思うので、その辺を逆にお願ひしたいと思います。ありがとうございました。

紺野 それでは時間となりました。私ども法人協会が、今回このテーマでシンポジウムを設定した背景には、今、深浦さんからもお話があったとおり、「農業が非常に注目をされている。雇用の受け皿としてもいいのではないか」といったような安易な論議があります。そんな簡単なものではないことは、ここにいる皆さんがよくおわかりだと思います。

そういった注目された農業の業界の中で、CSRを研究し討議し、ガイドラインを世の中に出していくというこの取り組みは、農業業界の中においても、私どもは進んだ取り組みをしているのではないかと自負しています。近い将来、今日のこのシンポジウム、あるいはこれから発行するガイドラインがどのぐらいの近い距離の間に世の中に浸透していくのか、非常に楽しみにしていますが、恐らく今日の議論、あるいはこのガイドラインが農業業界にお役に立っていくのではないかと考えています。

今日ご参加の皆様方におかれましても、引き続き農業版のガイドライン、あるいはCSRということに常に興味、あるいは関心を持っていただいて、みんなでこういった取り組みを進めていければというふうに考えています。

最後に、4名のパネラーの皆様に、ぜひ皆様より拍手をちょうだいしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

(拍手)

ありがとうございました。あと今日は、リンガーハットの深浦様と創コンサルティングの鷹野様とは名刺交換も可能ですので、どうぞそれぞれなさってください。以上です。ありがとうございました。

<終>